

安田 菜津紀(やすだ・なつき)

1987年神奈川県生まれ。studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。16歳の時、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとして、カンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。2012年、「HIVと共に生まれる—ウガンダのエイズ孤児たち—」で第8回名取洋之助写真賞受賞。共著に『アジア×カメラ「正解」のない旅へ』(第三書館)、『ファインダー越しの3.11』(原書房)。上智大学卒。

# ファインダー の向こうまで

フォトジャーナリスト・安田菜津紀が見た環境活動

Photo reportage by Natsuki Yasuda

高校生の時に訪れたカンボジアでの取材を皮切りに、世界、そして日本国内で貧困や災害の現場に寄り添い続けるフォトジャーナリスト・安田菜津紀。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に被災地を記録し続けている。そんな気鋭のフォトジャーナリストの目に、環境保全活動はどのように映るのだろうか。2013年から三井物産環境基金の助成先を撮り続けてきた彼女が、今回訪れたのは気仙沼の舞根湾と茨城県の霞ヶ浦。ずっと会いたかったという二人の姿を真摯に切り取ったフォト・ルポルタージュ。





畠山さんは牡蠣だけではなく、この地のホタテの養殖業の先駆者でもある。©Natsuki Yasuda

変わりゆく海を見つめながら、  
共に生き抜く術を探った

特定非営利活動法人 森は海の恋人 理事長

畠山 重篤 × 安田 菜津紀

1943年宮城県生まれ。気仙沼で牡蠣の養殖を営みつつ、気仙沼湾に注ぐ込む大川上流域への植林活動を20年以上に渡って続け、海・川・森を関連させて保全する重要性を訴え続けてきた。東日本大震災後は森林と牡蠣養殖の再生に取り組んでいる。

吸い込まれそうなほどに優しい緑の山道を抜けていくと、やがて真っ青な海が山影から顔をのぞかせる。波は穏やかに岸辺を洗い、ウミネコたちがはしゃぐように水浴びを楽しんでいる。水面が陽の光と共に、きらりきらりとまぶしいほど輝き、静かな波音と、潮の香りを乗せたそよ風が心地よい。

宮城県気仙沼市、唐桑半島の先端に位置する舞根湾を望む木々の間に、畠山重篤さんの書斎がある。父の牡蠣養殖業を二代目として継ぎ、実に半世紀近くを海と共に生きてきた。「“凪る”という言葉があるでしょう。海の様相のことですが、人の営みに生きる大切な言葉でもあります」。生活の落ち着き、そして人の心の安らぎ、この“凪”という言葉がまさに、これまで畠山さんが歩み、目指してきたものではないだろうか。

幼いころからこの地の人々の暮らしと自然の営みは一体だった。朝、家の下の岸辺で魚を釣り上げ、焼き魚にして食べてから学校へ。当時はウナギや貝類、海苔もとれる自慢の海だった。

そんな豊かな海に徐々に陰りが見え始めたのが、畠山さんが跡を継いで間もなく、1960年代半ばだった。「牡蠣が赤くて売り物にならない」と市場から連絡が入る。一日にドラム缶1~2本分(200~400ℓ)の海水を吸う牡蠣は、海水の汚れにはとりわけ敏感な生き物だ。牡蠣の赤味は、汚れた海で発生した赤潮だった。こうして生活が追い込まれ、次々に仲間たちが陸に上がっていくのを目の当たりにした。

舞根は入り組んだ湾の奥に位置し、外海の白波もすっと穏やかになっていく、養殖には申し分ない場所だ。ちょうど海と川の水が出会う場所でもあり、森林から流れてくる栄養をたっぷり含んだ水が、ふっくらとした牡蠣を育していく。けれども湾に流れ込む大川の流域は近年、何百年と続いてきた広葉樹林が人工樹林へと変貌し、生活排水や化学肥料が流れ込み始めていた。美しい海を守りなければ、山を豊かにしなければ。「森は海の恋人」という運動の始まりだった。

## 未来を担う子どもたちと、 触れ、感じる時間を築くこと

1989年、大川の上流にあたる室根山で、植樹祭が幕を開けた。室根山は県境を越えた岩手県一関市だ。「もともと、室根山と舞根は長い歴史で結ばれています。1300年近く続いている“室根神社大祭”は、舞根の漁民が室根山の見える場所から海水をくみ、御神体を清めることから始まるんです」。山の位置によって海の上での自身の場所を把握する知恵の一つが“山測り”だ。それに欠かせない室根山は、海の民にとっても靈峰なのだ。初めての植樹から25年、これまで植えられてきた樹は2万本を超える。

活動は山の木々を豊かにすることにとどまらない。畠山さんがさらに力を注いでいるのが、この川の流域に住む子どもたちを招いての学習会だ。「筏から牡蠣の様子を見せると、子どもたちから必ず出てくるのが“牡蠣の餌はなんですか”という質問なんです。そこで“どういうものを味わっていると思う?”って、プランクトン入りの海水を一口飲んでもらうんです。陸に戻って顕微鏡でそのプランクトンを見てみると、“こんなのが飲んでたんだ!”ともう大騒ぎ」。こうして触れ、感じるところから想像が膨らんでいく。なぜ海にプラン

クトンが湧くのか、食物連鎖とは何なのか。そして、そのプランクトンが食べているものを、自分たちが川に流しているのだと気付き、はっとする。巡り巡って自分たちも、それを口にすることになるのだと。「学習会に参加した子どもたちが家に帰ると、“お父さん、農薬減らそうよ”“お母さん、川に優しい洗剤使おうよ”と家族に話すんです。子どもたちから言われれば、大人も変わらざるを得ない。大人が変われば、やがて街ぐるみで環境保全型の暮らしへと変わっていってくれる」。山での植樹だけではなく、川の流域の人々の意識が変わらなければ自然は変わらない。子どもたちとの時間はこの活動にとって不可欠な存在なのだ。

運動も各地に広がりを見せ、これで子どもたち、孫たちに漁業を任せられる。ほっと一息つこうとした矢先に起きたのが、あの東日本大震災だった。遡上高25m近くの波に襲われた舞根では、52軒中44軒が被災。牡蠣筏、船、作業場、あらゆるもののが黒い波に飲みされ、生き物たちは姿を消した。「さすがにこれまでかと思いました。海は死んでしまった。もう養殖は続けられない」と。



この年も大ぶりで身の厚い牡蠣が順調に育っていた。





## 自然と共にたどり着いた、 “豊かさ”的輪を広げるために

ところが東日本大震災から4カ月ほどたったころ、小魚たちが集まり始めたのを皮切りに、貝や海藻が現れ、湾内はあっという間にその彩りを取り戻していった。「あの黒い波は実はへどろではなく、陸から流れ堆積した土だった。津波によって養分が巻き上がったんです」。山と川と、この海を支える礎が生きている。穏やかな舞根湾は、復旧作業も進めやすい。人の生活と自然の再生は同時にできると確信した。あれほど村を破壊し、人の命まで奪っていった海。それでも、その海の力と共にもう一度立ち上がりう。家や家族を亡くした人々と手を携えながら、共同作業が始まった。大粒で濃厚な舞根の牡蠣は、みるみる復活を遂げていった。

日本の漁業の担い手は減ってきていると言われている。体力を要する仕事であるにもかかわらず、収入につながらないと、若者たちが敬遠する傾向にあるからだ。だからこそ、食べていける背中を、孫子の代に見せたいのだと畠山さんは語る。

豊かな自然を守っていけば、品質の高いものが生まれ、結果的に人の生活も成り立つ、と。

そんな畠山さんの“豊かさ”的輪を広げるためには、とてもシンプルなものだ。「海のものがおいしいと、皆一緒にお米だって食べたくなる。こうしておいしい物が出回り、幸せを噛みしめる瞬間を増やすことが、社会の活気の源になる」。自然の循環の中に身を置くその生き方は、地域の垣根を超えて、日本中へ、そして世界へ。畠山さんの挑戦は続いている。



船上での牡蠣談義。経験の蓄積から紡ぎ出される言葉の重みを噛みしめる。

【助成案件名】舞根湾のがれき清掃活動ならびに生物環境モニタリング  
【助成期間】2011年4月～2014年9月（3年6ヶ月）

<http://www.mori-umi.org>



## 心の中に残り続けた 里山の原風景

特定非営利活動法人 アサザ基金 代表理事

飯島 博 × 安田 菜津紀

1956年長野県生まれ。95年から湖と森と人を結ぶ霞ヶ浦再生事業「アサザプロジェクト」を開始。湖岸植生帯の復元や外来魚駆除事業、谷津田の保全事業などを、地域や企業、行政、農林水産業を結ぶネットワークで展開している。

一瞬大海原と見間違えてしまうほど、穏やかな水面が彼方まで広がり、清々しい風が吹き抜けていく。茨城県南東部から千葉県北東部にまたがる日本有数の湖、霞ヶ浦。胸下まですっぽりと胴長で覆い、水中をゆっくりと歩いてみると、夏の暑さが残る中とはいえ、ひんやりとした感触が足先にも伝わってくる。「この辺は遠浅になっていて歩きやすいんですよ」と慣れた足取りで水をかきわけていくのは、NPO法人アサザ基金の代表を務める飯島博さん。実に20年にわたり、この霞ヶ浦をはじめ、拠点を置く茨城県牛久市周辺の豊かな自然と共に生きる道を見出してきた。波で削られ続いている湖岸に厳しい目線を向けながらも、水底を網でくくとり、エビや小さな小魚を見つけると、飯島さんの顔が少しほころぶ。

長野県塩尻市で生まれた飯島さんは、その後家族で千葉県市川市に住まいを移した。「当時の市川にはまだ、森林と共

に生活を営む人々の姿がありました。人と自然は同じ空間を分かち合いながら生きられる。そんな里山の原風景が心の中に残ったのです」。魚や昆虫、植物について、このとき自然と身に付いた知識が今でも糧になっているという。

そんな飯島さんが次に移り住んだのは、緑豊かな野山から一転、東京都渋谷区。車や人々の喧騒に囲まれながら、中高時代を過ごすことになる。当時はちょうど、4大公害病の裁判真っただ中でもあった。自然と共に暮らしてきた人たちが、真っ先に発展のゆがみに巻き込まれていくことに、違和感がぬぐえなかった。

高校卒業後、つくば市にある農水省の農業環境技術研究所に非常勤の職を得ると、牛久に移住。そこは幼少期を過ごした市川のような、美しい里山の風景が残されている場所だった。この風景を生かしながら、未来を築くことはできなかろうか。自然観察会など、小さな活動の積み重ねが始まった。

## アサザがくれた、 力づくではない優しい発想

やがて、ほかの自然保護団体や研究者との縁も広がり、その中で霞ヶ浦の自然を守る活動にも声が掛かる。霞ヶ浦は1970年代からの開発に伴い、湖岸はコンクリートに被われ、湖と海の間に建設された逆水門(常陸川水門)によって海から湖への水の動きが遮断されてしまった。ヤマトシジミやシラスウナギなど、数多くの生き物たちがこの時姿を消していった。それに輪をかけるようにして生活排水による汚染、アオコの大量発生と、このとき霞ヶ浦には環境問題が山積み状態だった。

こんな広大な湖を前に、一体何ができるだろう。そう考えていたある日、歩いて湖の周辺を調査していた時のことだった。波で削られていくヨシ原を調べようと湖岸に目をやると、コンクリート岸では白波が立つほどの水のうねりが、水面に浮かぶ植物の中でさっと止まるのが見えたのだ。アサザと呼ばれるこの浮葉性の植物は、春先に岸辺で発芽し、水位が上がる6月ころになると湖に入り繁殖、9月には黄色い花が顔を覗かせる。けれどもその風景は年々減りつつあった。「このアサザの存在が、発想を促してくれたんです。力づくではない方法で、この湖を変えることはきっとできる、と」。

このアサザを守ることから始めよう。飯島さんはまず、市民に種を渡して発芽まで栽培してもらい、ある程度大きくなったものを霞ヶ浦に植え替えるという「アサザ里親制度」を提案した。反響は

大きく、子どもたちの声を受けた学校、企業、そして行政へと、その活動は枠組みを超えて広がりを見せる。「市民による公共事業」が徐々に形作られていった。

やがてアサザ基金の活動は枝葉を広げ、湖だけではなく、水源地である谷津田や森林の保全にも力を注ぐようになった。これまでプロジェクトに参加をした人数は25万人を超える。さらには外来魚の魚粉を肥料にした野菜作りなど、業種の枠を超えてのビジネスモデルも築かれつつある。「大切なのは自然を“管理”することではなく、働き掛けなんです。何をどう分かち合っていけるのか、常に自然とコミュニケーションをとることなんです」。

そんな飯島さんがとりわけ大切にしているのは、子どもたちとの時間だ。学校やその近隣に集まる生き物たちの観察、学校内のビオトープ作りなど、触れ合いにあふれた飯島さんの授業は、地元はもちろん、全国各地の子どもたちに届きつつある。「谷の地形を読み取ったり、風の流れを生き物の目線で捉えてみたり、自分たちの学区内にまだ虫や小さな生き物たちが生きられる世界があることを見つけていくんです。人間の築いた境界線を超えた連続した空間が見えてくる。大切なのは、空間を読み直すことなんです」。○か×かの世界で区切られることのない、「どうして?」「なぜ?」の問い合わせの連鎖の中で、子どもたちの感性は次々に開花していくという。



すくい取ったアサザの葉。その育成への道を、根気強く探し続ける。



拾い集めた水草や網にかかってきた生き物の様子など、たゆまぬ観察の積み重ねが活動を支える。©Natsuki Yasuda



## 新しい発想は 出会いの中で見つかっていく

そんな子どもたちの力は、必ず大人たちへと波及していく。地元小学校では自ら資料を集め調査をした結果を基に、牛久市へ街づくりの提言を子どもたち自身が行っている。中学校では谷津田で作られた米を使ったせんべい作りが始まった。無農薬への想いがある農家や障がい者の作業所に彼らから働き掛け、商品作りのための連携を呼び掛けていく。商品を売る段階で関わった人の想いをどう伝えていくか、何度もプレゼンを重ねていく。こうして自然との共生を目指し地域を巻き込んでいく、そういう活動が、未来の街を作り出す原動力となっていくのだ。

そんな飯島さんが描く将来像は、地域の枠を超えた哲学にある。「イノベーションって、既存の選択肢の中ではなくて、想定外の出会いの中、つまり人同士や自然との間に出来るものだと思うんです。こうして凝り固まることなく世界を読み替え続ける姿勢を広げていきたいと思っています」。触れ合い、感じ合い、壁を溶かしていく。そんな飯島さんの生き方との出会いが、「命」を感じる瞬間を増やしてくれるようだった。



霞ヶ浦で一緒にさせていただいた。慣れない水中で追いついていくのは至難の業だ。

【助成案件名】アザザプロジェクト—環境を機に活性化する地域社会  
【助成期間】2009年10月～2012年9月（3年間）

<http://www.asaza.jp>